

終戦直後の花里吉正の

闘病生活と誓い

— ホームヘルプ事業推進者の苦悩と成長に焦点をあてて —

中 鳶 洋

『中京大学現代社会学部紀要』 第13巻 第2号 抜 刷

2019年12月 PP. 31～54

終戦直後の花里吉正の 闘病生活と誓い

— ホームヘルプ事業推進者の苦悩と成長に焦点をあてて —

中 畠 洋

I. はじめに

長野県社会福祉協議会（以下、県社協）組織課長としての活躍が評され、同県社協会長、同県民生委員協議会会長、（社福）上田明照会会長らより表彰された花里吉正（1921.1.15-2008.12.14、のちの竹内吉正、以下、花里）は、戦後、日本最初の組織的なホームヘルプ事業とされる家庭養護婦派遣事業の推進者として注目され（森 1972:31-9;1974; 竹内 1974:51-69;1991:14-29; 米本 1985:8-30; 鎌田 1986:63; 須加 1996:87-122; 上村 1997:247-57; 山田 2005:178-98; 荏原 2008:1-11; 中畠 2008:83-98;2010:71-83;2012:75-85;2013;2014a;2014b;2014c:31-45 など）、とりわけ、その担い手であった家庭養護婦たちが、「対象とする貧困に飛び込み、貧困のなかから相互に自覚を呼び起こし、相互に意欲をかきたててきた」と（竹内 1974:56）、母子家庭出身の家庭養護婦が同類の悩みを抱える在宅生活者を支援した点に着目し¹⁾、援助者と被援助者との相互理解や共感を花里は重視する。加えて、「誰でもが迎える老人像の現実、また幾度か経験するであろう人生の終焉に立ち会い、奉仕員は異口同音に深く感じ、自らに置き換えて模索するとき、大きな意識改革を呼び起こし、力強い息吹きをしている」と（同：66）、誰もが迎える老いの課題に関し、被援助者の立場を我が事として置き換える重要性や意識改革の必要性を示唆する。こう

した諸点は、地域包括ケアや自立支援が強調される昨今においても、共通して求められ、ここから、花里の慧眼を看取できよう。ところで、このような着眼や発想はいったい彼のいかなる生活体験や背景事情からもたらされたものなのだろうか。

近年の調査研究によれば、4年間の軍人生活ののち、長野赤十字病院での約5年間の闘病中、カナダのメソジスト婦人宣教師 E・L・Bates (1892- 死亡年月日不詳、以下、ミス・ベーツ) との人格的交流があったことや²⁾、入会した上田聖ミカエル及諸天使教会 (日本聖公会) の水藤牧師による物心両面にわたる支援があったことが指摘される (中寫 2019)³⁾。また、1955 (昭和 30) 年 7 月 11 日に上田市社会福祉協議会 (以下、市社協) 初代事務局長に就任するまでに、横内浄音、関澤欣三、竹内あき、花里兄妹などの多くの関係者に支えられてきた事実も浮き彫りにされつつある (同)。しかしながら、1942 (昭和 17) 年 7 月の陸軍飛行隊への入隊から、1946 (昭和 21) 年 7 月の復員を経て以降、約 5 年間に及ぶ長野赤十字病院での闘病生活そのものの詳細が依然として明らかになっておらず、この間の花里の生活体験や思想展開の探究なしには、彼の慧眼や炯眼の根拠にアプローチできまい。なぜなら、人は自分の思い通りにならない時や弱っている時にこそ、自己を顧みたり、自省する契機を得ることが少なくないからである。

そこで、本稿では、第二次世界大戦終戦直後における花里の闘病生活の実態と、そこでの彼の誓いに焦点を当てて、彼がどのように苦悩し、熟思しながら、いかにして内面的な成長を遂げていったのかを明らかにすることを目的とする。こうしたホームヘルプ事業史上のキーパーソンの苦難や逆境を精査することは、人々のニーズをどのように把握したり、困難・苦境をいかに克服すべきかを考える際のヒントを得ることになる。研究方法としては、終戦直後に記された花里直筆の 2 冊の日記 [『闘病乃記 (感謝感激)』 (1949 年～1950 年 2 月、本稿では日記①とする)、『愛神の記 (花里吉正記)』 (1950 年 8 月～1951 年 5 月、本稿では日記②とする)] を主

に引用・分析し、併せて、彼がその当時を回想しながら記した「父親の里、佐久の家のことども及び妹はる枝が追い求めた幼児教育」（宮坂編 1993:30-7）及び筆者作成の「竹内吉正の年表」（1886年1月27日～2009年6月24日）を参照する。一方、倫理的配慮としては、花里関連史料の引用許可並びに研究の範囲内での公表の許可を彼の実兄、花里吉見氏から得た（2009年10月3日）。また、筆者の所属校の研究倫理審査委員会から承認を得た（中京研倫第2019-007号、2019年7月17日承認）。

以下、Ⅱ．では、花里の闘病生活の実態と「三十而立」を検討し、Ⅲ．では、入院中の花里がある盲人や婦人宣教師ミス・ベーツから受けた思想的影響を具体的に探究し、Ⅳ．では、読書及び句作への奮闘と、齢三十にしての花里の誓いを照射し、Ⅴ．では、総括を述べる。

Ⅱ．闘病生活の苦しみと「三十而立」

1．母親の八回忌と花里の病状

日記を通して、彼の闘病の苦しみが端的に表われるのは、1949（昭和24）年9月以降である。それは、「一生制約された環境の中にひびの入った極有限的身体を労って行かねばならない一種の諦めを人に知って貰へない。」などに表出され（日記①：1949年9月23日）、戦争犠牲者としての身体的不自由さは勿論のこと、「近況話に打解ける母の佛前の供物を持参し、過ぎし二十五日の八年忌を始（ママ）めて思へば愈々不孝なるを恥ず。」にも見られる如く（同：10月27日）、8人兄妹の次兄として、また両親亡き家庭内の大黒柱として十分に活躍できない実情に苦渋している様を看取できる。社会動勢としては、連合国軍総司令部（GHQ）が「社会福祉六原則」を指示するなど、厚生行政地区の整備や社会福祉主事の設置が急がれたが、宮坂編（1993:34）の「両肺粟粒結核、痔ろう潰瘍あり、大気安静療法で先ず十年」との診断結果のみでは、当時の花里の心境や療養生活そのものが窺い知れない。反面、「結核と云ふ病ほど人間の人間たる所以である理性の働きを要求する病気はない。病を救ふは唯理性あるのみ。」

との日記の記述からは（日記①：1949年9月24日）、結核という重い病を患い⁴⁾、苦しい時こそ理性的であろうとした花里の態度が彷彿とされ、加えて、以下からも、彼にとっての眞の闘病とはいかなるものかが解読できる。

闘病とは有限にして無力な肉体を自覚し、この凡ゆる肉体的欲望を制約して精神的無限界に活路を見出し、この高尚なスピリットが肉体を覆ってなほ余りある極地にまで高める意義が肉体の修養（ママ）と相俟って存在するのではなかろうか。眞剣に力強い療養生活を積んで居る人々の中に闘病によって磨き上げられた寂光の美を見出す眞の療養は肉体的なものより眞に精神的意義の分野が遙に大である。（同：23日）

ここから、有限かつ無力な肉体のみならず、無限の活路につながる精神面に着目し、肉体的なものより精神的なものこそが「寂光の美を見出す眞の療養」につながるという花里の思考を汲み取れるが（同）、とはいえ、精神力の必要性の一方、医学的見地に基づく科学的診断も重要であり、この当時の花里の病状は、「左肺尖端部のラッセル未だ取れぬ模様なり。」（同：10月31日）、「自覚症状はよくとも病遅々として良好に向はず。齒の鈍痛と共に静臥沈思す。」（同：11月16日）、「左肺尖部のラッセル解消との言、医者より受く。大いに大喜す。」（同：1950年1月4日）、「午後X線結果を云はれ空洞の实在を認めらる。正に心境の動揺あり。即刻対策考慮す。」などと（日記②：1950年11月21日）、安定することなく、彼を一喜一憂させていた。こうした状況下で花里は、「我々は死と紙一重にある感強し。」などと死を身近に感ずる一方（日記①：1949年11月3日）、「……我は妹一人一人それ以外に何物もない。妹のための妹の幸福なる前途のため一日でも永く見て居なければならぬ。母親として兄上と共に見守ってやる事こそ、我一生の使命だ。然り正に然り。而して之を通じてよりよき正しき指導者であるべく我も亦研鑽すべきであろう。」と述べ（同：16日）、

死への認識を介し、妹の幸福のための前途を慮るに至っており、4人の妹の兄としての使命や役割を再認する⁵⁾。

2. 手厚い看護とある看護婦への恋心の芽生え

このような使命を感じ得る一方、花里は、自身や彼の病室仲間に手厚く看護を施したある一人の看護婦（現、看護師）に対し、謝意を示すとともに、特別な感情を抱いている。花里は、「看護婦さんに手厚き看護を受け事更に我身の整然たる環境と若さに惹かれてか、私情を含めて心やりを受く。受くれば誠に熱情ある気持が動き、その人に対して異様な感に捕はれ勝ちである。」などと記し（日記①：1949年11月19日）、異様なほどまでに熱情を動かされている。加えて、「六病棟に勤務初めより信交の念のあったK看護婦。今日に到ってその人を知れば知る程何かしら偉大なる魅力を感じ、何時しか友情を越える何物かがある様にも思はれる。」という文章も見られ（日記②：1950年8月上旬、伏字筆者）、この他にも、「Kさんと屋上に会す。」（同：3日、伏字筆者）、「やはり感謝の人、友そして最も親愛なる人として我に得られた贈として最も清く最も尊いものとして永遠に迎へたい人だ。」などと（同：14日）、彼の熱情が充ち溢れているのが分かる⁶⁾。

他方、「今日此頃。恋の問題に関しては全く苦しむ。不可解だ。」（日記①：1950年1月18日）と率直に吐露し、さらに「ミューセ作の小説に戯れ恋はすまじと云うがあり、我に強く感ずる處あり。」（日記②：1950年8月28日）、「之以上深くすることはお互に不幸なることを思ひここに再びあの人は我初恋の人であると共に感謝のみの人として留めたい」（同：9月3日）、「この女性には我、再三考慮する處あり。結局感謝の人として応へることとし、それ以上の心は自制すべきを繰返すも会すれば心、いと動揺す。」などと記し（同：10月2日）、入院中の花里は大きく動揺しつつも、諦念しようと努める。さらに、「恋より結婚に至るには余りにも吾は適当な身でない。一生、プラトニックに過す身だ。苦しいが苦しいが、プラト

ニックの域を脱する事の出来ぬ人間だ。苦しい。淋しい。おお、神よ。」などと（日記①:1950年1月18日）、プラトニックな愛に渋難や寂寥の感情を抱いている⁷⁾。

このように悩みに悩んだ挙句、花里が採った打開策は、「我、理性にて安定した気持にて居り度きも、之を見る時大いに感動揺す。やはり我はここより早く去るべきなり。病に破れんとせば恋愛せよ、病に男々しく強く勝たんとせばすべからく恋愛を捨てよ。」との文言から（日記②:1950年10月28日）、恋愛よりも病の克服を優先し、そのためには男らしく同院からのいち早い退院を選択するということであった⁸⁾。

3. 「恋してはならぬ人、愛すべき人」と「三十而立」

このような大胆な決断を下した花里は、1950（昭和25）年1月15日に、満29歳の誕生日を迎え、「三十而立」という聖訓を持ち出し、熟考する。彼は、焦る気持を押さえながら、何事にも基礎が重要であり、それは個を知ることであり、自身の長短を把握するなかで会得できるものと認識し、次のように主張する⁹⁾。

歳二十九の誕生日を迎ふ。今日を見て先づ感ずるは「三十而立」三十ニシテ立ツの聖訓である。立ツと云ふ意味はある地位に成人すること、又ある方面に指針を決定して進むこともあるかも知れぬ。しかし、立つからには基礎が無ければならぬ。基礎即ち個を知ること之を指す。我を知ること、我の弱きを知ること、我の余りにも美しきを知ることなりと断言す。床に入り愛の凡てであるを知り、我の弱きにより神の不動を知り、懺悔せば我に反すること、即ち美しき我魂を知る。斯る意味に於て我はこの日が最も嬉しい。気分許されればこの心境を留め度きもの。（日記①:1950年1月15日）

上記より、花里にとって「三十而立」の立つとは、自分の弱さや美しさ

を含め、「我を知ること」そのものであると把握していたことが窺える（同）。それは、彼を相当苦しめた恋愛も例外ではなく、彼自身、「恋愛を成立させて居る当事者達の熱情の強さが如何にその恋愛を白熱させても、それらを永く燃やし続けさせる生活の薪のない處ではそれは一瞬の焰に過ぎない。」などと記し（日記②：1951年3月27日）、生活を持続させる重要性を認識している。つまり、端的に言えば、経済的に自立できていない自分にとって恋愛は極めて難しいことを、「一瞬の焰」に例え、痛感する。一方、「人間の自由と独立とのない世界ではその一瞬の焰でさえ、闇のつらなりである人生のつかのまの喜びである。私たちの祖先はそう云ふ悲しい恋の中に人間性の一瞬の完全燃焼をみたのである。」と（同）、先祖代々を慮りつつも、花里自身は、「吾は斯くあり度くない。」と言明し（同）、一瞬の輝きだけに終始するのではなく、生活を継続的に送るなかで人間性を発達させるものでなければならないとする。

Ⅲ. 花里が同室者及び見舞客から受けた思想的影響

1. ある盲人の入室と眞の心の友を求めて

手厚い看護を受ける一方で、こうした複雑感情を秘めていた花里は、病院内の同部屋の療友からも影響を受けていた。それは、日記を紐解くと、1949（昭和24）年11月24日に入室してきた〇〇という盲人男性との出会いに象徴される（伏字筆者）。「〇〇氏たる盲の人入室して来らる。身寄り無き人故、病者挙げて〇〇氏に便宜を與ふ。」（日記④：1949年11月24日、伏字筆者）、「〇〇さんの奥様、心臓病のため昨夜死亡の報あり。盲人の身愈々孤独となる。元気は良いものの今日はさすがに沈んで居られた。歳六十二と云ふ。」などから（同：25日、伏字筆者）、不幸な身の上にさらに配偶者の死が重複している〇〇氏の惨状を花里は目の当たりにしている。

だが、その翌日以降には、「盲人〇〇氏は極めて明るく充実感のある人である。母子の間にてても斯く喧嘩事の絶間無かった△△氏とその妻子を失

ひつつ盲の身の人、〇〇氏とは感謝の生活、そして愛に包まれて居る点が異って居る。三者の受ける印象の差は総てこの愛と感謝に外ならず、大いに感銘深し。」(同:26日、伏字筆者)、「盲人〇〇氏も愉快に雑談に入り室も明るし。」(同:28日、伏字筆者)、「〇〇氏の意気闘病心の旺盛に室員動かされるものあり。盲人偉なり。」などと記し(同:29日、伏字筆者)、〇〇氏の生き方や生活ぶりに感じ入り、ここから、逆境にある盲人の生活態度からも多くを吸収している。

一方、別日の花里は、病室内で療友たちと会話や雑談をするなかで、「……我、主張する言葉はどうやら不可解らしく誠に物足りないものを感じず。」などと不満感を抱き(日記①:1950年1月7日)、「心の友、眞の心の友がほしいのだ。老若男女を問はず、心の友がほしい。」と(同:1950年1月23日)、必ずしも眞の心の友を得ていないと、本音を漏らす。

2. 婦人宣教師、ミス・ベーツによる見舞いと聖訓

但し、こうした眞の心の友を見出すことは容易ではなく、またある程度の月日も必要であった。そうしたなか、幾度となく彼の見舞いを続けた婦人宣教師ミス・ベーツから花里は少なからぬ影響を受け、信仰心を高めるきっかけを得ている。ミス・ベーツが所属したカナダメソジスト教会の歴史については、上田小県誌刊行会編(1968)、上田新参町教会(1992)、塩入(1992)、『カナダ婦人宣教師物語』編集委員会編(2010)などに詳しいが¹⁰⁾、例えば、1950(昭和25)年から1951(昭和26)年までの間に彼女が花里を訪問した様子は以下のように整理され、二人の関係性の一端を看取できる。

ベーツさん、軽井沢より帰られ早速見舞に来て下さる(1950年9月2日)、ベーツさん来り。聖訓を示す。(同21日)、午前中、ミス・ベーツ見舞に来て下さる(同年10月7日)、ミス・ベーツ、ゴールデンデリアスを持参し見舞に来て下さる(同年11月9日)、正午近くミス・

ベーツ来らる（同18日）、ミス・ベーツ来り（同30日）、夕刻、ミス・ベーツと西沢さん来り（同年12月2日）、正后、ミス・ベーツ来り（同14日）、午後三時、教会よりコーラスの方を連れてミス・ベーツ来る（同24日）、ミス・ベーツ見舞いに来る（1951年1月9日）、ベーツさん及西沢さん来り（同年2月3日）、午前中ミス・ベーツ来る（同年3月29日）（日記②：1950年9月2日～1951年3月29日）

なかでも、1951（昭和26）年1月9日に、見舞いを受けた花里は、「他がどうであろうと自分だけは神に恥じない言動をしたい。そして愛する手を以て人を愛したい。」と神を信ずる者としての心持を新たにし（同：1951年1月9日）、一方、同年3月29日には、「クリスチャンとして最も悪いことは、神の証を伝へずに黙して居ることなりと。即ち神の事は何ら人を恐れること無く伝へ一人でも多くの人に喜びを分つ事なりと現在証としても又聖訓を告げて、その行動が伴はず批判され勝手な自己ではあるが、黙たる中に眞に体得し得た神の証は大いに他に分つべきを思ふ。」と熟考する（同：3月29日）。彼が、ミス・ベーツから影響を受けつつ心の中で詠じた文章には、「病身の永きに及んでも尚又希望の達せられざるとも我は神と共に歩まん。神ありせば……」などがあるが（日記①：1949年12月26日）、このような沈思黙考はやがて、彼自身に眞の幸福とは何か、眞理とは何かを考えさせる一つの契機となる。

3. 幸福についての考察と眞理の把握

日記の続きを紐解くと、1949（昭和24）年12月7日には、「昨夜は我に記念すべき時間であった。」という書き出しとともに（日記①：1949年12月7日）、花里の祈りや思いが顕在している。それは、「目に映ずるものは又感ずるものは凡て千萬変なるもの。唯神に対してのみ我を安楽の世界に活きらる正に然り。信ずべし、信ずべし、神の救ひを 天の神様 天の主 罪ある我を救ひ給へ 自ら床の中に合掌す。合掌すべきを強いて居

た過去と異なり、自然手を合した気持の一時は昨夜から始る。大いなる十二月七日の夜、この信仰、この神に対する祈りは終始忘れまい。歌を繰返す。思ふても 思ふて流す事々の わずらふ胸に 聖書いだきて。」などと記述され(同)、ここから、彼が自然に合掌する自分自身を認識し、「思ふても 思ふて流す事々の わずらふ胸に 聖書いだきて。」をひたすら唱えていたことが看取できる。こうした実直な生活態度はやがて、「幸福とは何か」を考えさせ、花里は次のように熟考する。

朝暖炉焚き終りしに看護婦長来り、曰く、幸福とは、環境に支配されず、常に自己満足する事であり、又得たる喜びを分ける事の出来る人なりと。而して幼時には自己に給はる事に最大の幸福を知るものなりと。病者大いに感ず。我思ふ 之一にその根本は パンのみに由らず 神の言葉を知る事に在りと断ず。(同:16日、傍点筆者)¹¹⁾

この記述は、彼が生涯もっとも好んだ聖訓である「マタイ六章の二十五節」に関係し、花里自身、日々、「思い悩むな(ルカ 12 22-32)」の理解の深化を図ろうとする(日本国際ギデオン協会 NKJ/新共同訳 2007:15)。さらに、1950(昭和 25)年 10 月 2 日には、「人の生きるはパンのみに依るにあらず 神の口より出ずる凡ての言葉による 例ひ我死の谷間を歩むとも わざわいを恐れず 汝我と共にありせば 汝の若者の杖歳を慰む I am the good shepherd, the good shepherd give his life for the sheep. アーメン。」という聖句を日記内に認め(日記①:1950 年 2 月 27 日)、この教えを自分のものにしようと努める。

反面、自身の置かれた状況を捉え直した花里は、「自己の凡ゆる慾望を捨て没我、新生の一途を歩むべき病なり。病に倒れんとせば恋愛せよ 病に勝ち人生を一步よりよく前進せんと慾せば恋を捨てよ 而して我が道を征け おお天に存する我が父よ 大きく強く我を導き給へ 我は天の父と常に 天の父と常に一にして二ならず 従はん 又 愛さん」と書き記し

（日記②：1950年10月2日）、ここから、細々とした日常の困難事に左右されず、亡き父を偲びつつ、大志を抱くことで神と軌を一にしようと念願していたことが分かる。但し、そのためには、「眞理を把握することこそ重大」と認識し（日記①：1950年1月7日）、「常に自分対神であるとしてその人に接するその心、即ち我は神と共にあるべき」と感得し（日記②：1950年12月5日）、神と接する如く、人に接しようとする¹²⁾。

Ⅳ．読書・川柳句作への奮闘と齡三十にしての花里の誓い

1．読書生活並びに川柳句作から得たもの

このように常に神に向き合おうとし、ひたむきに祈念した1950（昭和25）年前後の花里は、宗教的信仰を背景とした幸福追求や眞理探究に奮励し、他方、日頃の生活において趣味の一つでもあった読書や川柳句作にも奮発する。こうしたとり組みが彼の思想形成に与えた影響も少なからずあったと考えられる。そこで、この頃に彼が読んだ書籍を日誌から拾うと、「山本有三著『女の一生』（1949年8月17日）、ゴルキー著『どん底』（同年9月16日）、キルケゴール著『死に至る病』（同23日）、山本茂實著『生き抜く悩み』（1950年1月8-11日）、今村正一著『心の衛生』（同年2月19日）、トルストイ著『生きる道』（同年9月1日）、小林有方著『眞理とは何ぞや』（同年10月22日）、『Gone with the wind 風と共に去りぬ』（1951年5月5-9日）、石田波郷・長谷川如是閑著『眠られぬ夜のために』（同17-18日）」などが挙げられる（日記①：1949年8月17日～日記②：1951年5月18日）¹³⁾。

なかでも、1950（昭和25）年1月11日に山本茂實著『生き抜く悩み』を読んだ花里は、「先づ我は生き抜く悩みを生き抜く喜びと題を代へて褒しかった。」と同書のタイトルに注文をつけつつ（日記①：1950年1月11日）、「何となれば我は葦なりと自覚する時、不動の信念、即ち信仰を獲得すれば悩みは歓喜なる故、共鳴点又多く、特に過去は悔ひる余地なき過去であらねばならず、現在又同様未来も亦然るべき事に努力する處に人生あ

り。之はその儘、死の意義あらしむるもの也と断ずる辺り、大いに感あり。又孤独は意義深きもの。孤独は弱き我の自覚であり、零の我でありされば人生観の出発点なればなり。又、著者曰くエゴイズムはもっと普遍的なもの、一般的なものに通ずると、正に然りとする一面なり。」と論じ（同）、人生観の出発点を認識する。

一方、キルケゴール著『死に至る病』を1949（昭和24）年9月23日に読み、「重症患者によく見られる絶望感、焦燥、自暴自棄、放慾失望の総べて暗迷な世界に終始する様では其の人の眞の価値はない。あくまで闘ふのみである。『光は闇より』この一面矛盾の中に千萬量の深いものがあると思う。キルケゴールが死に至る病は絶望なりと叫び、絶望の無の極地から神を見出し、このキリストによって救われたと云う。この精神界まで飛躍せねばならない。」と記述し（同：1949年9月23日）、やがて訪れる死を思うことは絶望に他ならないが、それを単なる絶望で終わらせず、絶望の無の極地に至ることで神と出会い、救われると認識している。この記述に、花里における闘病の決意と精神界への飛躍を念じた祈願を捉え得る。

つまり、ここから、闘病中の花里は、最初からホームヘルプ事業の必要性を見出したり、社会福祉分野の書籍のみを中心に読書していたわけでは決してなく、「立つからには基礎が無ければならぬ」と論じたように（日記①：1950年1月15日）、文学、衛生学、人生論、哲学などを幅広く捉え、思考の鍛錬を行っていたと認め得る。山田（2005:178-98）や荏原（2008:1-11）などの先行研究では、竹内（花里）がとり上げられることはあっても、彼が思想面で少なからぬ影響を受けた読書については着目されず、花里の思想形成過程が見過ごされていたため、本稿ではその経過と内容を捉え直した。

さらに、川柳句作では当初、花里は「和峯」と号して『信濃毎日新聞』などに投句しているが、のちに、「八人の我等兄妹の和を示し、斯く号して愈々詩歌の道に入らんとする」ことを志し（日記①：1949年12月14日）、「八木和風」と号して活躍する。具体的には、「夕刊に三句出る」（同：1950

年2月19日)、「終日作句に意を費す」(日記②:1950年12月9日)、「兎に角聖書と作句に熱中する」(同:1951年1月26日)、「八木和風の名にて夕刊に八句最上級に出ず。苦しむ斗病に先づ以て作句と聖書のみにて進まん。」などと奮闘している(同:28日)¹⁴⁾。つまり、ここでは、句作が彼の集中力や創造力を向上させるとともに、「八木和風」と号し、兄妹8人の結束の強化が図られようとしていたと捉え得る。

2. 「神の道を我が道としたい」と齢三十にしての誓い

著名な哲学書に感化されたり、八木和風と号し川柳作家としても奮闘していた花里は、定まらない病状のなか、「勉強すべき予定のものは多々あり。種々なる考想に独り希望に富む。」などと記し(日記①:1949年10月13日)、復活に向けて試行錯誤する。またある日には、「将来の町工場の親分としての夢をも画いて見る。」など(同:11月4日)、その将来像を具体的に描こうとしたりもした。さらに、「軟化と感情に富む躬に今年は恋に苦しんだ今年であった。」などと吐露し(日記②:1950年12月31日)、恋愛問題でも悩みが尽きなかった。しかしながら、反面、「我ながらに道の拓けた事は神を信ずるが故であった。恋は失はれ又失はねばならなかったが、我独り尊し、戯れの恋にはあらず」と記すように(同)、いよいよ信仰に没入しようとする。それは「他がどうであろうと、吾は神を信じ、神の道を我が道としたい。室員一人一人が一日も早く一時でも眞に神を信ずる人である様に祈り度い。」にも象徴され(同)、神に通ずる道を自分の足で歩み自身の道を作ろうとする。

1951(昭和26)年1月15日、30回目の誕生日を迎えた花里は、「我三十歳に達しての誕生日なり。斗病の躬として人生の零に立脚し、日新成長を期する處あり。朝食時室員に桃缶を切り開き分ちて喜びを分つ。室員は中野高校の英語教師三井宣誉氏、戸隠小学校教員小島英久氏、鉄道機械部勤務の茅野巖氏の四名なり。」と当日の様子を詳述し(同:1951年1月15日)、その上で30歳の節目に、以下のような3つの誓いを立てる。

- 一 青春の宝、自慰行為を厳禁す。
- 二 絶対の正直を守る。室内に我に対して口に出ずる程の偽善者呼ばわりの空気があった。之はクリスチャンである我の率先的勇気の行為に反する諸々の事々を照らしてのことと想像す。特に正直でないと批評する人のあるのは遺憾でもあり、何はともあれ、独り反省する處あり。この頃を守る。
- 三 行動を謙虚にすること。元旦の早々雑煮をひっくり返し大騒ぎをなし、昨朝は又かい巻を暖炉にいぶし大失敗。一月早々のことごとくに齡三十に達した人物として大いに行動を謙虚にしたい。(同)

つまり、上記から、これまでの自身の生活態度を改め、禁欲、正直、謙虚の3つを具体的目標に定め、精進しようとする。これは、彼にとっては神の道を我が道として歩こうとすることに他ならず、「神の意のままに進むことは正に新しき人生を歩むの感あり。愛することのみなり。絶対愛を全うせんがためには絶対正直絶対無私絶対純潔の条件を守るべきなり。自己本位の愛は無用の忍耐を要することも痛感す。」という文章にも(同:2月11日)、彼の意向を汲み取れる。

他方、1951(昭和26)年3月19日には、「オックスフォードグループ」の実話を聞いた花里は、胸を打たれる経験している。それは、「最も強い記憶でも最も薄い墨よりは弱いと。Morning watch の際の記録を重要視し、『想像と意志とが戦争したら想像が勝つに決って居ます。ですから想像は神に御捧げない。さうすると、想像の中から悪が蒸発してふと有用な幸福な生活が残りますよ』と。」という文章にも窺え(同:3月19日)、ここから「神に一斎を任することの必要性を訓された」という(同)。そして、神の聖聲として、「一 注意深き祈りに於て a 聖書を通じ b 良心を通じ c 感想を通じ d キリストの心の培養によって與えられます。」と「二 聖書の心読と祈祷とによって(與えられます。)」の2点を学び取っている(同、丸括弧内筆者)。加えて、その理由として、「a 境遇により b 理性

により c 信徒の交際によってこわされます。こわされぬ場合は自分の心の状態を点検しなければならない。本当に一切を棄てているかどうか。最後に、グループの指導者は、それは自分が今までに有った信仰の中で一番高いものに比べてどうか。それは聖書に現れたキリストの聖言と合って居るかどうか。それは本当に神と人とに正直な非利己的な慈愛的なものかどうか。それは他人への義務と責任とに衝突しないかどうか。」などと論じ（同）、神の聖聲を聞くための個々の要素を吟味している¹⁵⁾。

V. まとめ——考察と今後の課題

以上、本稿は、空白となっていたホームヘルプ事業の推進者とされる花里吉正（のちの竹内吉正）の第二次世界大戦終戦直後に焦点を当て、彼の思想形成や思考基盤の一端にアプローチすることを目的とし、次の2つの課題をもっていた。第1に、終戦直後の花里の闘病生活の実態を明らかにすることであり、第2に、その生活から生み出された彼の思考や誓いを浮き彫りにすることである。

第1の課題に関しては、「結核と云ふ病ほど人間の人間たる所以である理性の働きを要求する病気はない」との自覚の下（日記①：1949年9月24日）、肉体的なものよりも眞に精神的意義の分野で奮起することで、「寂光の美を見出す眞の療養」を志向した（同：23日）。また、左肺尖端部のラッセルがなかなか取れず、病状も安定しないなか、一方で、恋愛面でも大いに苦悩し、一途にプラトニック・ラブを貫こうとした（同：1950年1月18日）。こうしたほろ苦い経験は、彼自身に、「恋してはならぬ人、愛すべき人」という認識を芽生えさせ（日記②：1951年3月5日）、加えて、29歳の誕生日を迎えた花里に、「三十而立」の意味を熟考させた。

このような内面的洞察に加え、同室の療友であった盲人患者、〇〇氏の生き方や婦人宣教師ミス・ベーツの見舞い・聖訓などからも少なからず動かされ、「もっともっと強い何ものかをつかみたい」（日記①：1949年11月30日）、「もっと信仰に活きた力を持ちたい気持ちに立つ」などと（同：12

月4日)、信仰心を高める効果をもたらし得た。こうした思想展開の末に彼が辿り着いたのが、「幸福とは何か」、「眞理とは何か」という人生における究極の命題であり、この思想展開は彼自身の思考力や探究心を研磨させていたと言っても過言ではない。山田(2005:194)は、「同病相憐れむという低所得者への『共感』がベースにあることが要求された」と、花里(のちの竹内)が言及した家庭養護婦派遣事業推進の一方策を端的に述べるが、実際に、後年の花里は、「福祉元年」と称された1973(昭和48)年の『生活と福祉』誌上の座談会で、「現在の高度成長の中で、本当の福祉的生活のリズムを再創造するのは、今の老人にしかできないのだと思うのです。…(中略)…昔に戻れといっているのではないが、スピード化されている現在の需要と供給のバランスを再確認しながらも、人間としての貴重な生活体験をもつ老人の、正に今、果たすべき役割が、ここにあると私は思う。」と(<座談会>1973:10)、人生上の経験の重さを思考し、幸福や眞理を老人という被援助者側に立ちながら考察しており、自己を客観化させ得る遠因となっていた。

他方、第2の課題については、自らが認めた日記を『愛神の記』と命題したように、常に「自分対神」という認識の構図をもって熟考していた花里は(日記②:1950年12月5日)、キルケゴール著『死に至る病』や山本茂實著『生き抜く悩み』などをはじめとした数々の著書や、八木和風としての川柳句作などを通じ、自らの思考力や創造力といった力能を磨く鍛錬を怠らなかった。このことが齢三十にして、「禁欲・正直・謙虚」という3つの誓いを立てることにつながっていた。終戦から間もない、戦後約5年前後という時期でもあったため、こうした地道かつ慎ましやかな療養生活を送らざるを得なかった面もなくはないが、少なくとも、花里が人生の分岐点になったという「人生の逆境において重大事に触れた」という一文では済まされない悲喜こもごもの実体験を彼はしており(中寫2012:78)、このことも、後年の花里に、「家族が老人の生活をみるといっても、十分にみてやれないような、切迫した生活環境に家族もおかれてい

る」（〈座談会〉1973:6）、「家族の将来の生活設計の中に、施設に送り出した老人を、また迎え入れるという、積極的な考えが欠けている」などと（同：7）、療養患者や入所者の“家族復帰”の意義を強調する思考へとつながっていたと認識し得た。本論で述べたような入院患者としての彼自身の苦悩や経験もこうした着想の背景要因の一つとなっており、本稿では、新たな史料発掘調査を進め、未解明であった終戦直後の花里の実像という戦後日本のホームヘルプ事業史の背景思想の一頁を照射した。

なお、人物史研究を中心に論じた本稿は、純粋な社会福祉学領域の学術論文とは言えないかもしれないが、反面、戦後わが国のホームヘルプ事業の推進をリードし、幅広い社会福祉分野のなかでも在宅福祉・地域福祉のあり方を先進的思考と実践的手段により探究しようとしたキーパーソン、花里吉正の壮年期を、思想的根拠を基に論考する上では、不可欠なものと位置づけられる。今回の結果は、「住民と共に考えるという姿勢があった」と言及される花里の証言の背後に（荏原 2008:7）、いかなる彼自身の苦闘や熟慮があったのかを実証的に掘り下げるものであったと言えよう。

最後に、今後の研究課題としては、花里が終戦後の1950（昭和25）年に記した『和峯記』（1950年3月～1950年7月）を分析することをはじめ、戦前の花里の生活実態や思想形成を追究すること、さらには、1970年代以降の彼の職務内容及び役割を実証的に解明していくことである。地方の民間社会福祉事業の進展に寄与したキーパーソンの人物像や背景を追う作業は緻密でなければならず、さらに果てしなく続いている。

注

¹⁾ 中寫（2014c:37）によれば、初期登録家庭養護婦（10人、うち、1人は取り下げ）は、「最年少26歳、最年長60歳、平均年齢45.3歳、「未亡人」率44.4%（9人中4人）、一人暮らし高齢者1人となる」となっている。

- 2) ミス・ベーツに関しては、「1947年にはミス・ベーツが上田に駐在して幼稚園事業、教会の伝道牧会に協力している」と記される一方（上田新参町教会 1992:146）、読売新聞社（1952:8）にも、「まず他人を信頼——カナダの婦人宣教師の直言」と題し、その思想の一端を垣間見れる。なお、同記事には、「長野市県町在住カナダ婦人宣教師 E・L・ベイト女史」と顔写真付きで紹介されている。
- 3) 上田聖ミカエル及諸天使教会は、元々、1901（明治 34）年に R. H. マギニス司祭によって、上田市馬場町に開設された講義所を伝導の起点とし、1904（明治 37）年には上田聖公会（当時）を設立し、2019（令和元）年現在、宣教 118 年目を迎えている（st-michael. jp/church/guide. html#history,2019 年 8 月 14 日取得）。その詳細は、上田小県刊行会編（1968:1213-4）に詳しい。
- 4) 因みに、1949（昭和 24）年当時の結核対策は、凍結乾燥 BCG ワクチン製造法が結核研究所で完成し、同所で小川培地の開発が行われたが、第 1 回結核実態調査が実施されたのは 1953（昭和 28）年になってからのことであり、実態把握や対策が十分とは言い難い状況にあった（森 2002:131）。
- 5) 「我の最も愛すべき女性は我妹に外ならない。妹のために我は生れて来たのかも知れない。少なくとも父母の後、今は体力に範囲ある躬となったからには、よりよき人生は我がよりよき人生は妹のためにある。誠に然り。おお、我、親愛に充つ妹よ。」にも（日記①:1950 年 2 月 5 日）、花里における兄妹愛の深さが窺い知れる。
- 6) しかしながら、「昨夜話題に関連して K 看護婦に対し、自己の眞の気持、病身なればこそ眞の恋に陥ることなく、感謝の人として交りたいとその心情を明らかにする文書を綴るも、之を渡す期会を逸す。しかし、後から考へてやはり現状からしては渡さなかった方がよかったと思ふ。熟慮の果は余り睡眠取られず。」との文章から（日記②:1950 年 10 月 24 日、伏字筆者）、彼の悶々とした思いや苦悩が偲ばれる。

- 7) 例えば、「我は好感を持たれつつ、一途プラトニックにある。」（日記①：1949年12月6日）、「プラトニック・ラヴに終ろう。独り蔭ながらに誰にも云はずに。淋しい。さあ、俳句でも作ろう。そして不動の神に祈ろう。」などにも（同：1950年1月18日）、そのことが表出される。
- 8) 「軽き頭痛の中に俳句を練るもよきもの得られず。りんどう誌に上位を占めて我句掲載される。嬉し。ここを早く去り度い。やはり早く、大病に患ふ吾身に初恋の人ここにあれば、やはり早く一時でも早くここを去り度い。」にも（日記②：1950年11月10日）、花里のいたたまれない想いを感得できる。
- 9) 一方で、「Kさんは恋してならぬ人、そして感謝すべき人、愛すべき人だ。愛する事は凡ての人に、そして恋することは唯一人唯の一度だけしか許されぬものだ。…（中略）…忍んで行くそして許しそして愛する。自分の道はそれより無い。」と（日記②：1951年3月5日、伏字筆者）、花里は自制しつつ熟思する。
- 10) とりわけ、カナダメソジスト上田教会（現、日本基督教団上田新参町教会）においては、「キリスト教の事業の日本における功績の一つは幼児教育と女子のための諸学校の創設である」とされ（上田小県誌刊行会編 1968:1213）、その展開についても、「カナダメソジストは静岡・山梨に英和女学校を設け、長野にもこれを作ろうと準備したが、幼稚園に切りかえ、明治33年宣教師ハーグレーブとランプレーの努力によって上田に梅花幼稚園を設けた。幼稚園は33年現地に移され、43年には常田幼稚園も開設された。この地方の本格的な幼児教育の場として画期的の事業であった……」などと論じられる（同）。
- 11) その一方、「兄来院す。美味しい物質は之よりニュースも入り楽し。下駄履きにて来る兄を見、家庭にあるものの難苦が思はれ反省せざるを得ない。誠に感深いものあり。我は兄あるが故に幸福なり。」（日記①：1949年12月17日）や、「春生句集を兄上に贈って兄弟愛を互に反省するにつとむ。兄上よ もう一度 眞の愛の生活を省みたい。」など

にも（日記②：1950年9月8日）、花里の兄弟愛を看て取れる。

- ¹²⁾ なお、「汝を愛する如く隣人をも愛す。愛は総て公平に平等でなくてはならない。その中には自己本位、人間主体とした感情的愛であつてはならない。理性的に又意志的に源とした愛即ち天の父を我々が愛する如くであり度い。特に特定の人を愛する恋、そんなものは今の自分から遠ざけたい。唯々、新生の一途は神を愛するのみ。愛神即ち愛人のそれに外ならぬ。ここにこの日誌を愛神の記と題す。」と述べ（日記②：1950年10月4日）、花里は、日記のタイトル名の由来に言及する。
- ¹³⁾ 「『眠られぬ夜のために』の石田波郷・長谷川如是閑著の部分を読み、安静の中に若き旺盛なる斗病精神の必要を痛感す。極めて憂鬱感に捕はれ、何れ成さんとする気慾なし。」にも、先の見えない彼の闘病の苦しさが表われる（日記②：1951年5月18日）。
- ¹⁴⁾ 「終日作句に意を費す。健康者と比すれば誠に病者は平凡にして快樂なき日日である。人生、その目的は神の掟を如何に守り、如何にして祝福すべき天の国に近付けるかを努めることである、とせば、今日此頃の如く、平凡の中にも神と共に最もつまらぬことを忠実に行ふ様努める自己が却って幸福な人生であり、安定の道かも知れない。」という記述にも（日記②：1950年12月9日）、川柳句作の奮闘ぶりと、花里なりの幸福感の一端が窺える。
- ¹⁵⁾ 花里は、「吾はただ斗病一本、最善を画すのみ。凡てを愛し、許し、及ばざるは祈る吾であり度い。」と決意している（日記②：1951年3月24日）。

付記 本稿は、科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金：基盤研究（C）19K02172、研究代表者 中寫 洋）の研究成果の一部である。

史 料

花里吉正（1949-1950）『闘病乃記（感謝感激）』（1949年8月1日-1950年

2月，本論では日記①と記す）

花里吉正（1950-1951）『愛神の記 昭和二十五年八月一日ヨリ』（1950年

8月～1951年5月，本論では日記②と記す）

読売新聞社（1952）「まず他人を信頼——カナダ婦人宣教師の直言」『読売新聞』第27076号，1952年4月28日，第8面。

文 献

Alfred de Musset (1834) *On Ne Badine Pas Avec L' Amour*, LIBRAIRIE STOCK (= 1977, 進藤誠一訳『戯れに恋はすまじ』岩波書店)。

荏原順子（2008）「ホームヘルプサービス事業揺籃期の研究——長野県上田市における『家庭訪問ボランティア支援事業』の背景」『純心福祉文化研究』（6），1-11。

Maxim Gorky (1902) *Les Bas-fonds* (= 1961, 中村白葉訳『どん底』岩波書店)。

Carl Hilty (1901) *Fuer schlaflose Naechte 1. Teil* (= 1973, 草間平作・大和邦太郎訳『眠られぬ夜のために 第一部』岩波書店)。

今村正一（1951）『心の衛生叢書』心の友社。

鎌田宣子（1986）「在宅福祉サービスの新たな展開——ホームヘルプ協会の活動を中心に」『調査季報』（91），62-67。

上村富江（1997）「上田市のホームヘルプサービスを担った女性たち」『社会福祉のなかのジェンダー』ミネルヴァ書房，247-57。

『カナダ婦人宣教師物語』編集委員会編（2010）『カナダ婦人宣教師物語』東洋英和女学院。

Kierkegaard, Søren (1849) *Sygdommen til Døden* (= 1957, 斎藤信治訳『死に至る病』岩波書店)。

小林有方（1956）『真理とは何ぞや？——ヨハネ一八ノ三八』中央出版社。

歴史学研究会編（1966）『日本史年表』岩波書店。

Margaret Munnerly Mitchell (1930) *Gone With the Wind* (= 1977, 大久

保康雄・竹内道之助訳『風と共に去りぬ』新潮社).

宮坂亮一編 (1993)『和を以て貴しと為す——花里家の記録』花里吉見.

森 幹郎 (1972)「ホームヘルプサービス」『季刊 社会保障研究』8 (2), 31-9.

森 幹郎 (1974)『ホームヘルパー』日本生命済生会社会事業局.

森 亨 (2002)「日本の結核流行と対策の 100 年」『日本内科学会 創立 100 周年記念号』91 (1), 129-32.

長野県ホームヘルパー協会 (1991)『長野県ホームヘルパー協会二十年の あゆみ』.

長野赤十字病院 (1984)『長野赤十字病院八十年の歩み』長野赤十字病院.

中寫 洋 (2008)「ボランティア活動の実践からホームヘルプ事業化への 道すじ」『上智大学教育学論集』42, 83-98.

中寫 洋 (2010)「家庭養護婦派遣事業の支援システムの形成に関する研究」 『日本の地域福祉』(24), 71-83.

中寫 洋 (2012)「竹内吉正における地域福祉論の形成過程と基礎構造」『日 本の地域福祉』(25), 75-85.

中寫 洋 (2013)『日本における在宅介護福祉職形成史研究』みらい.

中寫 洋 (2014a)『ホームヘルプ事業草創期を支えた人びと』久美.

中寫 洋監修 (2014b)『現代日本の在宅介護福祉職成立過程資料集 第 3 卷 家庭養護婦派遣事業——長野県上田市資料 1』近現代資料刊行会.

中寫 洋 (2014c)「草創期における家庭養護婦派遣事業と家庭養護婦」『社 会事業史研究』(45), 31-45.

中寫 洋 (2019)「家庭養護婦派遣事業推進の背景思想へのアプローチ— —上田市社会福祉協議会事務局長時代の竹内吉正を中心に」『社会福 祉学』60 (3).

日本看護歴史学会編 (2008)『日本の看護 120 年——歴史をつくるあなたへ』 日本看護協会出版会.

日本国際ギデオン協会 NKJ/ 新共同訳 (2007)『NEW TESTAMENT 新 約聖書』日本聖書協会.

- 塩入 隆（1992）『長野県町教会百年史』日本基督教団長野県町教会。
創立 100 周年記念誌編集委員会編（2004）『長野赤十字病院創立 100 周年
記念誌』長野赤十字病院。
- 須加美明（1996）「日本のホームヘルプにおける介護福祉の形成史」『社会
関係研究』2（1）,87-122.
- 竹内吉正（1974）「ホームヘルプ制度の沿革・現状とその展望——長野県
の場合を中心に」『老人福祉』(46), 51-69.
- 竹内吉正（1991）「ホームヘルプ制度発足の周辺」『長野県ホームヘルパー
協会 20 年のあゆみ』第一印刷, 14-29.
- Lev N. Tolsotoj（1939）Way of Life（= 1949, 小西増太郎訳『生きる道』
桃山書林）.
- 上田小県誌刊行会編（1968）『上田小県誌 第三巻 社会篇』小県上田教育会。
上田市社会福祉協議会 50 年の歩み編集委員会編（2006）『住民と共に歩ん
だ 50 年』上田市社会福祉協議会。
- 上田新参町教会（1992）『上田新参町教会百年史』日本キリスト教団上田
新参町教会。
- 山田知子（2005）「わが国のホームヘルプ事業における女性職性に関する
研究」『大正大學研究紀要 人間學部・文學部』(90), 178-98.
- 山本茂實（1979）『生き抜く悩み——哲学青年の手記』角川書店。
- 山本有三（1951）『女の一生（上）』新潮社。
- 米本秀仁（1985）「北海道におけるホームヘルパー史」『北のホームヘルプ
活動——町に生きるおとしよりの杖になりて』北海道ホームヘルパー
協会, 8-30.
- <座談会>（1973）「老人を追う レポートを読んで」『生活と福祉』
(209), 4-10.

